

Title	日本語とタイ語における提案に対する反対意見の対照研究
Author(s)	Kunpattaranirun, Wanwisa
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/59139">https://hdl.handle.net/11094/59139</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	クンパッタラニラン Kunpattaranirun	ワンウィサー Wanwisa
博士の専攻分野の名称	博士（日本語・日本文化）	
学位記番号	第 25055 号	
学位授与年月日	平成24年3月22日	
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語社会専攻	
学位論文名	日本語とタイ語における提案に対する反対意見の対照研究	
論文審査委員	(主査) 教授 鈴木 睦 (副査) 教授 宮本マラシー 教授 真嶋 潤子 准教授 筒井 佐代 准教授 荘司 育子	

### 論文内容の要旨

日常生活において他人と異なる意見を持ち、時にそれを表明しなければいけない状況がしばしば起こる。反対意見表明という言語行動は、他人と異なる自らの意見や提案を述べることで相手のフェイスを脅かす恐れが強く、結果として人間関係に摩擦を起こす可能性が高い行為である。相手との関係を良好に保ちつつ相手に反対することは、たとえ母語話者同士であっても注意を要する言語行動である。外国の日本語学習者にとって、コミュニケーションの方法が母語と目標言語で異なるときには、コミュニケーション上の様々な問題が生じる可能性がある。

そこで、本研究では日本語とタイ語における反対意見の述べ方を事例として対照してその異同を分析し、相互交渉の過程を考察することを目的とした。研究の流れとして、まず、I) 談話完成テストを資料として、提案に対する反対意見の発話レベルの問題について量的分析を行い、次にII) ロールプレイ調査の結果を資料として、談話レベルの問題について質的分析を行うことにより、相互交渉の過程を考察した。分析枠組みとしては、Beebe & Takahashi (1990) の意味公式を用いる。

二種類の調査の資料集方法、分析方法及び主な結果は以下の通りである。

#### I. 発話レベルの分析方法と結果

##### (1) 資料収集と分析の方法

調査対象：22歳から55歳まで（中心となるのは26歳から34歳である）の日本語母語話者とタイ語母語話者の社会人、各50名ずつ合計100名である。

資料収集方法：談話完成テストを用い、「会社の忘年会を行う場所について、相手の提案に対

して反対意見を表す場面」を設定し、相手は「上司」「同僚」「後輩」など、被調査者からみて目上・同等・目下関係の3種類に分け、この場面で各相手に対して、どう反対意見を表明するのかを被調査者に記入してもらった。

分析方法：談話完成テストから得たデータを意味公式によって、反対意見の発話を分類を行った。

##### (2) 主な結果

- 1) 提案に対する反対意見の発話に意味公式によって分類すると、＜相手の提案の拒否＞＜付加詞＞＜自分の提案の主張＞の3種類が見られた。両言語共に提案に対する反対意見を表す時、使用する意味公式は、＜相手の提案の拒否＞＜付加詞＞＜自分の提案の主張＞の順で一致しており、量的にはあまり差がないが、各意味公式の低位分類を考察すると、大きな違いが見られた。
- 2) ＜相手の提案の拒否＞の発話として、日本語母語話者は、どの相手にも関わらず、【理由：自分の提案の長所】と【承諾の延期】を使用するのに対し、タイ語母語話者は、どの相手にも関わらず、【理由：自分の提案の長所】【確答の延期】【相手を思い止まらせる】を使用した。
- 3) 目上に対して、タイ語母語話者は、目上の提案を批判する【相手の提案の短所】を使用するが、日本語母語話者は全く使用しなかった。
- 4) 相手の提案に賛成も反対もしない発話を＜付加詞＞として分類したが、日本語母語話者は、目上に対して、「それはいいですね」「楽しそうですね」などの目上の提案に対する【好意的な反応】をよく使用するが、タイ語母語話者がよく使用するのは「課長」「先輩」などの【呼びかけ】であった。【好意的な反応】は、目上の提案に関心や肯定的な態度を表すのに対し、【呼びかけ】は、目上が目前に存在することを示すため、日本語母語話者とタイ語母語話者が目上に対して違い方法で配慮を表すことが明らかになった。
- 5) 日本語母語話者は＜自分の提案の主張＞するとき、相手との上下関係等に合わせて様々な言語形式を使用した。タイ語にも様々な言語形式が存在するが、本調査のタイ語母語話者から得られた資料に現れた結果は、相手との上下関係に関わらず「△△△△(△△dii) (・・・がいい)」「khít waa △△dii kwaa (・・・と思う)」に限られている。
- 6) 日本語母語話者は、相手への配慮として「次回はあなたの案にしましょう」のような【承諾の延期】をよく使用したが、タイ語母語話者は、「他の人に聞いてみましょう」「上司に聞いてみましょう」のようなその場で決定をしない【確答の延期】をよく使用した。

## II. 談話レベルの分析方法と結果

### (1) 資料収集と分析の方法

調査対象：25歳から45歳の日本語母語話者とタイ語母語話者各40名ずつ合計80名である。

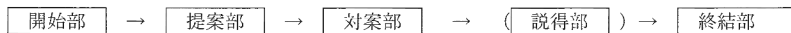
資料収集方法：ロールプレイを採用し、ロールプレイの場面には、「会社の忘年会を行う場所 についての話し合い」を設定し、「課長－部下」、「同僚－同僚」、「部下－課長」の3種類に分けた。日本語母語話者とタイ語母語話者を同性同士10組に分け、ロールプレイを実施し、録音したロールプレイの文字化を行った。

分析方法：意味公式により、各発話を分類し、談話構造を分析した。次に各発話の連鎖を考察し、日本とタイ語の共通点と相違点を探った。

### (2) 主な結果

#### 1) 談話構造全体の特徴

今回のロールプレイでは、まず会話者1が「提案」を出し、次に、会話者2が、その提案に対して「対案」を用いて応答するように設定されている。本研究で分析対象とした日本語とタイ語（各30会話）の会話は全て以下の構造をしている。



談話構造の大枠は、日本語もタイ語も共通しているが、日本語の会話が何らかの決定に至るのに対して、タイ語の会話は「他の人に聞いてみましょう」のような【確答の延期】によって保留されるものが圧倒的に多かった。

2) 【提案表示】をする時、日本語母語話者は「ちゃんこなべがええかなと思ったんだけど、どうかな？」などの【提案表示】＋【相手の意見を聞く】の発話連鎖をよく使用するが、タイ語母語話者は「私はカラオケがいいと思います」などの【提案表示】のみをよく使用した。

3) 提案を出す時、日本語母語話者とタイ語母語話者は、異なる方法で相手への配慮を示した。日本語母語話者は、相手に選ぶチャンスを与え、断ったり否定したりしやすいようにするため、どの相手にも関わらず、【提案表示】には「かな」「だけど」「なんか」などの自分の主張を和らげる言語要素をよく使用した。一方、タイ語母語話者は、【提案表示】の前後には【提案の長所】を何度も述べることによって、真剣に提案を出して、相手の話し合いの時間を無駄にしないことを表していた。

4) 相手の提案を拒否する時、日本語母語話者は目上に対して、【他人の理由】をよく使用し、同等と目下に対して、【相手の短所】【否定的な評価】を使用した。一方、タイ語母語話者はどの相手にも関わらず、【相手の短所】と【否定的な評価】をよく使用した。

5) 日本語母語話者には、目上と話すとき、目上が目下の提案に否定的な態度を示すと、目下

は目上の提案を受け入れる傾向が強いのにに対し、タイ語母語話者は目上が目下の提案に否定的な態度をしても、目下は【自分の提案の長所】などを利用して、目上が目下の提案を受け入れるように説得するのが多かった。

- 6) 相手に提案を出せるという配慮は日本語の会話でもタイ語の会話でも現れたが、その配慮に対する応答は異なっていた。日本語の会話では「どこがいいと思う？」という【提案要求】に対して、共に提案を考える同時に相手に先に提案を出すように「どこがいいですかねえ」「考えないといけないですねえ」などの【間を持たせる】【共感】を使用した。一方、タイ語の会話では、【提案要求】に対して、相手を優先にして、先に提案を出すように「課長、どうしますか」「あなたはどこへ行きたいですか」など質問の形で応答した。
- 7) タイ語の会話は、《終結部》で「他の人に聞きましょう」などの【確答の延期】で会話が終わるのがよく見られた。日本語の会話でも、その場で決めずに、決定を保留する例も見られるが、「両方の店へ行ってみてから決めましょう」で【確答の延期】で終わるのが多かった。

以上のようにタイ語母語話者と日本語母語話者との談話を比較分析した結果、談話構造の大枠は共通しているが、実際のコミュニケーションの進め方には、大きな違いがあることが明らかになった。日本語教育での会話では、句型やその他の言語形式に注目して学習を行うことが多い。しかし、本研究で試みた談話レベルの分析結果を考慮すれば、今後は発話の連鎖や相手への配慮の方法が言語によって異なる点など、より実践に即した会話学習を行う必要があることが示唆された。本研究は教材開発分野においても、会話例の作成や教室内のロールプレイで教師が注意すべき点を指摘できるという点で本研究成果は貢献できるであろう。タイ語母語話者と日本語母語話者との間でより円滑なコミュニケーションのより効果的な学習に少しでも貢献できれば幸いである。

### 論文審査の結果の要旨

反対意見を表明するという言語行動は、相手のフェイスマスクを脅かす恐れが強く、母語においても難しいが、目標言語と学習者の母語の違いにより、外国語の学習者にとってはさらに難しい問題となる。本論文は、日本語とタイ語について、反対意見を表明する場合の異同を対照することにより、タイ語を母語とする日本語学習者に資することを目的としている。近年、日本語教育の分野で行われている言語行動研究の一環となる研究であり、日本語を分析するだけでなく、学習者の母語との対照研究は、日本語教育の分野における重要な基礎研究となっている。タイ語と日本語の反対意見に関する対照研究は非常に少なく、単独の発話や隣接ペアを分析対象とするのではなく、ひとまとまりの談話を分析対照

としたものは、恐らく本研究が最初であろう。

反対意見にも様々な種類が存在するが、本研究では相手の提案に対する反対意見を分析の対照としている。大きく二つの調査方法がとられ、まず、I) 談話完成テスト(日本語母語話者50名、タイ語母語話者50名)を行い、どのような発話が用いられたかについて量的分析を行い、次に II) ロールプレイ(日本語母語話者40名、タイ語母語話者40名)を行い、談話レベルの問題について質的分析を行うことにより、相互交渉の過程を考察している。いずれの調査にも、分析枠組みとしては、Beebe & Takahashi (1990) の意味公式を用いている。意味公式による分析は、異なる言語間の言語行動を比較する場合に用いられる方法で、ある発話によって何が述べられたかを分類し、その言語形式等を比較対照するものである。二つの資料を使用することにより、両者の不備を補う論文構成となっている点も優れている。

あらかじめ、先行研究やパイロット調査によって、親しい間柄において反対意見が述べられることが多いことがわかっているため、親しい間がらの目上、同等、目下に対する反対意見の表明が設定され、提案者と提案される事柄の間に利害が存在しない「忘年会の場所を決める」という日常的な場面が設定されている。分析の結果、日本語においても、タイ語においても、相手への配慮がされるが、その方法には異なる点が多いという興味深い結果が具体的な例とともに示されている。

二つの資料によるどちらの分析においても、詳細で緻密な分析がなされており、その記述も明快である。特に、ロールプレイの資料に基づく分析においては、提案の談話構造全体が【開始部】- 【提案部】- 【対案部】- (【相談部】)- 【終結部】に分類され、どの部分にどのような意味を表す発話がどのような連鎖組織として現れるかが、順を追って示される。談話を分析対象としたことによって、単に反対の発話が見れるのではなく、相手の提案の短所を述べる、自分の提案を述べる、自分の提案の長所を述べる等、様々な発話による反対意見の表明が現れ、ロールプレイではあるが、実際の会話に近い談話が分析されている。

また、本稿の分析からは、異なる文化をもつ社会における言語行動の比較が非常に難しいものであり、またそれ故に興味深いものであることも読みとれる。両言語が異なる例をあげると、日本語においては、目上の提案に対して相手の提案に対する好意的な反応や、相手の提案に対して反対の表明となる自分の提案が、相手への配慮と共に行われるが、タイ語においては、親しい目上の提案に対しても相手の提案の短所の指摘が率直に行われること、相手への配慮としては、相手の意見を問うこと、相手の職階等を使った呼びかけが再三なされることがあげられる。上下関係よりも親疎関係が優先するというタイ語の傾向

が窺われる。また、相手の意見を問うことは両言語ともに行われるが、タイ語においては、問いかけてはいるが相手の答えを待たずに続けて自分の提案を述べるなど、意見を問うことが儀礼的なものとなっている例も見られた。

タイ語の社会では、目上と目下がともに異なる提案をしたときには、目上が譲歩することが期待されていることや、「忘年会の場所を決める」という比較的重要度の低い課題であっても、長い議論の後で結論が出た後に、「じゃ、他の人に聞いてみましょう」という確答の延期で会話が終了することが多いことなどの指摘は、言語の背景にある社会のルールが垣間見られる。本稿で分析された結果は、日本語だけでなく、タイ語の言語教育においても非常に重要なものであると言える。

以上の結果から、論文審査担当者全員で、クンパッタラニラン、ワンウィサ氏の博士論文を合格と認める。